

周辺からの記憶 10

～2012年度 福島～

村本邦子（立命館大学）

毎年、年度終わりにシンポジウムをやっているが、今年は2015年12月12日、『東日本・家族応援プロジェクト 2015』から見た被災地の今」と題するシンポジウムを開催した。5年目というプロジェクトの折り返し地点を過ぎたところで、現地の受け入れ窓口となっている方々を招いて、それぞれに見えている風景を共有し、これまでを振り返りながら、これからの考えていくことができたらと思ったのだ。そこから新たなネットワークが生まれることも期待した。

午前の部では、現地協力者の方々を中心に連携に焦点を絞って現地の状況を報告してもらった。あらためて感じたことは、私たちの曖昧模糊とした企画持ち込みに対する戸惑いと、それに何とか応えようとする先方の努力だった。それが良かったか悪かったかを言うことはできない。もともと互いに何ら義務のないところで、やるかやらないかの選択があり、やるのなら良いものにしようという意志があるというだけのことだ。何が良いかは、それぞれが決めることだろう。戸惑いつつも、プロジェクト実施のための体制や新しい企画を作ってきたことが現地の力になっていることを聞き、私たちの呼びかけに応答してくださった現地の皆さんにあらためて感謝と敬意の念を抱く。

午後は、各地でのプロジェクトの院生報告だったが、去年に引き続き東北各地の状況を横断的に聴く貴重な機会となった。少し前、「他者を介して聴く」という言葉に出会ったが、自らの感覚を根拠に語るだけでは、自らの枠組みを超え出ることにはできない。プロジェクトを通じてそんな積み重ねが実現していったらいいし、そのための場を開くこともまた大学が果たすべき役割だろう。



2012年度 福島準備

<実施体制>

2年目の福島。年度初め、昨年、共催してもらった福島県中央児童相談所にコンタクトしたところ、今年度、国が「東日本大震災中央子ども支援センター」という組織を設立し（実質は恩賜財団母子愛育会に委託）、被災3県にそれぞれ現地窓口を設置したという。福島県では、NPO法人ビーンズふくしまに委託され、子ども関係の支援者研修もその業務となるため、ここを中心に企画を運ぶということになる。時間経過とともに支援体制が組織化されてきたのだ。

幸い、ビーンズふくしまは、昨年、二本松で本プロジェクトに関わってくれていたということで（二本松チームは荒木穂積先生が運営）、話は早い。ということで、今年度は、東日本大震災中央子ども支援センター福島窓口（NPO法人ビーンズふくしま）とNPO法人きょうとNPOセンターの共催、福島県と福島県中央児童相談所の後援を頂いての実施となった。

<事前学習>

10月17日の研究会に、ビーンズふくしまの中鉢博之さんを招き、皆で「福島の子育て支援の復旧・復興の現状とその後のあり方」について話を聞いた。

福島県は、浜通り、中通り、会津の3つの地区に分けられるが、浜通りは震度6弱がほとんどで、余震もたびたび起き被害が大きく、とくに海沿いは甚大な被害を被った。原発から半径20キロ圏内では避難生活を余儀なくされ、いつ自宅に戻れるか見通しが立たない。20～30キロの避難指示解除

準備区域は自宅に戻ることはできるが、放射線のこと、事故が本当に収束したのかなど不安がある

避難状況としては、全町避難・全村避難で現在も一時帰宅しかできない町村、一時は全村避難していたが帰村した村、1つの市の中で避難地域が区分され、避難が分断されている地域がある。家や家族を流された、原発事故によって職を失った、今後の生活の見通しが立たないなかで、子どもと関わる余裕のない家庭もある。地震・津波によるPTSD、長期避難生活によるストレス、避難による家族との分離、家族分離による育児ストレスの増大が課題である。

中通り、会津は震度4から6強で、家屋にほとんど被害がなかった地域もあれば、建物が倒壊し、行政の庁舎や公共の施設等も使用不能になって庁舎移転を余儀なくされた地域もある。津波被害はなかったが、浜通りから避難してきた子どもに、津波被害を目撃した子どもたちがいる。原発から離れていても20キロ圏内より線量が高く、自主避難者が多い地域もある。福島市・郡山市・伊達市・二本松市など主に中通りの都市部で、山形県・新潟県などへの県外避難があり、放射線量がそれほど高くない地域でも、自主避難者が増え、母子避難が多くなっている。

その一方で、浜通りからの避難者が仮設住宅・みなし仮設住宅で避難生活を送り、放射線という目に見えないものとのつきあいながら生活している現状がある。子どもは1日3時間までしか外に出さない、食べ物の選択、外遊びができないなど、日常生活がすっかり変わってしまって、体重や運動能力など、発達にも影響が出てきている。

放射線についての考え方・捉え方が異なることによるストレス、自主避難に伴うストレス、母子避難による家族間におこる問題でのストレスや対立が課題となっている。

このような状況下で、福島県は、平成 24 年 10 月より子どもの医療補助を 18 歳まで拡大し、心のケアの取り組みとして『お子さんとパパ・ママのための心のサポートブック』を発行した。屋内遊び場確保事業、地域の寺子屋設置支援事業（仮設でのコミュニティ再生支援）、そして東日本大震災中央子ども支援センター事業が施策として取り組まれ、中央子ども支援センター事業をビーンズ福島が運営している。その事業は、ビーンズこころの相談室「まめの木プロジェクト」と、うつくしまふくしま子ども未来応援プロジェクトから成る。

相談室事業から見えてきたことは、震災後の PTSD に対処するような相談は当初の想定よりも少なく、震災前からあった課題が、震災を機に顕在化したケースが多いということ、被災者にとっての心のケアの取り組みは、カウンセリングという手法だけで解決できるものではなく、その生活や被災によって起こった課題に対して丁寧に寄り添っていくことが大事ということだった。

うつくしまふくしま子ども未来応援プロジェクトの方は、2011 年 9 月から土曜の午後、仮設住宅での子ども向けの遊び・学習支援を通じた支援活動から始まり、教育委員会からの依頼や保護者からの要望もあって、平日の夕方も実施するようになり、徐々に実施地域も拡大した。さらに、保護者会やイベント実施によって、地域で子どもを支えていく力を取り戻すことも視野に入れるようになった。子どもたちが落ち着きを

取り戻し、地域の評判も良く、避難生活が続く限り必要な活動であると考えているが、ボランティアやマンパワーの不足や資金的な見通しが立たないことが問題。その他、県外避難している母子の支援にも大きな課題があるということだった。

院生たちは、さらに、それぞれの視点から事前学習をして現地に臨んだ。

11月30日（金）福島入り

2 年目の福島。今回は、教職員 7 名、院生 5 名という大所帯である。遅れてくる人もあったので、教職員 6 名と院生 1 名で会場の下見。プログラムの材料の買い出しに行き、皆で袋詰めや見本作りなどの作業をした。今回からのパートナーであるビーンズ福島のスタッフも 3 人参加してくれ、わいわいおしゃべりしながら一緒に準備するプロセスは、互いに知り合い、一緒にプロジェクトを実施するチームとしてのウォームアップになった。





準備終了後は、場所を移して、食事会。ビーンズのスタッフになった経緯を聞かせてもらうことで、若い人たちの動きを知った。HP作成をしているスタッフによれば、「立命館×福島」で検索してビーンズふくしまに辿り着く福島市民が結構あるとのこと。大きな組織の強みでもあろう。プログラムの申し込み状況はひと桁代だが、昨年、一緒にプログラムをやった児童相談所の職員も申し込んでくれているということで、年を重ねるごとに定着していったらいいなと願う。

福島の現状としては、まず学校が除染され、グラウンドも使用されているが、プールは親の許可があるとのこと。親の判断や基準の違いは、子どもたちの人間関係にも影響を及ぼしていることだろう。福島市内の除染はまだ1割しか進んでおらず、放射性物質が含まれる物の処理ができないことが、除染作業をさらに遅らせている。場所によって放射線濃度は異なり、山の裾の地域には放射線が溜まりやすいということだった。

2012年12月1日（土）

<支援者支援セミナー>

朝起きると雪だった。ホテルロビーで待ち合わせて会場へ行き、会場の設営をする。10時半から12時は支援者支援セミナー。ビーンズ福島や会場となっている市民活動サポートセンターで支援活動をされている方々が集まってくれるが、朝から初雪が降り、スノータイヤに替えなければならないので、出足が悪いということだった。東北だ。今回、共催となってくれたきょうとNPOセンターからも野池くんが駆けつけてくれる。





まずは自己紹介と現状。最初に、支援の難しさが語られた。子育て支援をしても、若者の就労支援をしても、心の相談室にもあまり人が来ない。福島から子どもや若者がそもそも少なくなっているということなのだろうか。仮設住宅の支援でも、イベントが多いためなのか、何かやってもボランティアの方が多いう状況だという。

福島は、目に見える被害は少なくとも、気持ちの上で影響を受けている。これまでは近くに職場があって、ほとんどの人と気があわなくても、その中で3人と気があえばそれでよかったが、その3人がバラバラになったら行動できなくなる。また、放射線のことで、外から「こんな（放射線の）高いところでいて」と言われる。「私たちはここで暮らしているのに」と思う。外の人には心配しているつもりでも、心理的に圧迫される。元気に働けば解決していくことも多いと思うが、補償金のことある。個人的な苦難ならば、ここを乗り越えればと思

うが、公的な責任でこうなったのだし、仮住まいということもあり、前向きに立ち上がると言ってもなかなか難しい。微妙な立場だと思う。

他方、震災以前からの課題として、人との関わりのなかで援助を求めにくくなっていて、たとえば同居している祖父母に手助けしてもらえないはずの環境で、まず支援機関の方に言ってくる。大家族であっても、子育ては母の責任という意識が強く、祖父母の眼が気になる。被災ゆえの問題というより、元々あったものが表面化している。支援者が解決してしまうのではなく、家族を巻き込む支援が必要。

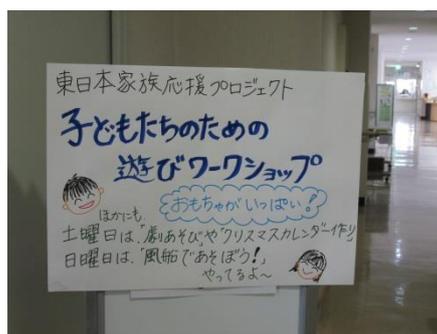
それから、支援されるばかりでなく、自分たちで動き出せることが重要だという話に移っていった。「支援対象者の自分」となると動けなくても、誰かのためなら動ける。やってあげるのではなく、これまで応援してくれた皆さんに感謝祭をやろうとか、彼らが自分たちでやっていくっていうことを支援していければいいんじゃないかなと思う。仮設に引きこもっている人たちに向けて、焼き物や農園など仮設にいても自分たちでできることを立ち上げられないか企画中という方もあった。

子育て支援にしても、子ども達をどう育てていくのか、どう育てていきたいのかを一緒に考えることで、コミュニティとしてまとまっていけるといい。親自身、人とのつながりが薄くなってきているので、これを機会につながりを作っていけたら。旧体制ではなく、仮設であたにできたコミュニティを主体的につくっていくことで、人とつながるのは面倒だけど良いものだというのを体験し、そのノウハウを持つと、た

とえ移動しても、次のところでまた作って
いけるだろう。

去年は、先が見えずどうしようもない状
況で無力感に圧倒されている印象が強かっ
たが、今回は、そのなかでやれることをや
っていこう、人と人がつながって、知恵
と工夫を重ねていけば、きっと何かできる
はずという希望を感じた。「福島を新しい
ステージにして大きなビジョンと小さな行
動で、情報交換をしながら進んでいきたい」
と最後にまとめてくださった声を聴き、遠
くにいる私たちも彼らとつながりながらで
きることを続け、福島の人々の力を伝えたい
とあらためて思った。

午後にあった尾上さんの「支援者のため
のドラマ表現ワークショップ」でも、「被
災者（被支援者）は支援者になれる」とい
うテーマが浮上したということだった。



<遊びワークショップ>

14時から15時半は、クリスマスのアド
ベント・カレンダーを作る遊びワークショ
ップ。今年も親子での参加が多かったが、
去年に比べて、子どもたちが自由に伸び伸
びしているのが感じられた。去年は、子ど
もの数より多い大人たちが見守るなか、子
どもたちは統制された範囲で安心して遊ぶ
ことができた。それだけ不安が高く、親子
の結びつきは緊迫していた。もちろん1年
経って不安が減ったわけではなく、根底には
さまざまな思いを抱えておられるだろうが、
それでも、自分たちはここで生きているの
だ、その中で精いっぱいやっていこうとい
う大人たちの覚悟があり、子どもたちの安
心と日常が取り戻されつつあるのだと感じ
られた。

去年も来てくれた親子もあり、昨年来て
くれた子どもが、今年は自分でチラシの情
報を見つけ、友達を誘って参加してくれた
という例もあった。子どもがカレンダー作
りをしている間、同じフロアのラウンジで
お母さん同士がお茶を飲みながらおしゃべ
りをしている姿も見られ、親子が離れて楽
しめるようになって良かったと思った。プ
ログラム終了後、子どもたちがかわいい文
字でアンケートを書いてくれ、「また来年、
会おうね〜！」と手を振ってくれた。



プログラムと並行して、東京おもちゃ美術館から頂いたおもちゃを使った遊びコーナーを設置していたが、そちらでも子どもたちが楽しげに遊んでいた。今年もカプラは大人気で、協力しあって高く積み上げる子どもたちがいたり、たくさんのおもちゃと一緒に壮大な街を作る子どももいた。

プログラムの前後、チラシを見た学校の先生や保護者から相談したいと話しかけられる場面もあった。できる範囲のアドバイ

スをしたが、やはり、震災による負荷によってもともとあった問題が浮き上がってきた印象を受けた。プログラムの付き添いで来てくれていた保護者たちと立ち話すチャンスもいくらかあり、被災の状況や子どもの様子を聞かせてもらった。「良かったこともいろいろある」、「このように応援してもらっていることがありがたい。子どもたちもしっかり大きくなって、お返しできるようになってくれたら」とおしゃっていた。去年、参加して、仮設での支援にクリスマスカレンダー作りをやってみたという方もあった。クリスマスカレンダーを作ることが直接支援につながるわけではないが、「クリスマスカレンダーづくり」という場を開くことで起こってくる出会いや関係の展開が意味を持つのだと思っている。漫画展も同様である。

夜は懇親会。会場に向かう道はクリスマス用にライトアップされ、広場でイベントをやっており、夜の街はにぎわっていた。



2012年12月2日（日）

<漫画トーク+遊びプログラム>

去年の漫画展は1階の入り口を入ったスペースでの開催で、センターに入ってくる人が必ず眼にする場所が確保されていたが、今回は場所が取れなかったということで、3階のひと部屋だった。わざわざ入ってきてくれる人しか見ることができないのが難点。せっかく準備した今年の冊子がないというハプニングもあった。残念だが、体制が変わったこともあり、やむを得ない。

私の最初の思惑としては、漫画展が開く偶然の出会いや会話がもたらすものを大事にしたいというものだった。受付でのさりげないやり取りや立ち話、お茶を飲みながら交わされる言葉、ノートに記されたメッセージを見ることなどが互いを力づけるだろうと思った。漫画展にアテンドすることになった清武くんや団さんは見事にこれを実現してくれていた。





情で戻ってきたということだった。こんなささやかな積み重ねが応援のメッセージとして届くと嬉しい。



並行して行われた「風船で遊ぼう」に集まってくれた子どもたちも、楽しい時間を過ごしたようだ。昨日のプログラムに参加して、「今日も絶対に参加する！」と言って来てくれた子もいた。「来年も絶対に来てね！僕も絶対来るから！」と何度も約束して帰った子もいたという。来年があるとわかっていることのありがたみを思う。また、子どもがプログラムに参加している間、漫画トークに参加した保護者もあり、良い表



プログラム終了後、片付けをして、昼食を食べながら来年に向けての反省会をした。現地の声としては、福島はイベントが多く、放射能に関する講演やこの状況をどう乗り越えていくかという研修が多く、今後は、何かを教えてもらうのではなく、「答えが出ないことを一緒に考え、寄り添ってもらえる存在」が欲しいということだった。どんな

形でそれができるのかわかっているわけではないが、現地の人たちの声に耳を傾けること、声にならない声に耳を澄ますこと、その一方で情報を求め学び、批判的に考える力をつけることが重要なのだと思う。



2012年度 シンポジウム

2年目のプロジェクトも無事終了し、2013年2月10日にまとめのシンポジウム「東日本大震災と対人援助」を開催した。午前は、「復興支援と対人援助～サービスラーニングの視点から」と題して、院生たちの報告、午後は被災地からのゲストを招いての報告とディスカッションだった。一日を通して、専門性と人間性、日常と非日常はつながっているということがテーマとして上がっていたように思う。

初年度より参加している臨床心理領域の院生西木多賀子さんは、サービスラーニングとしての学びについて、「技法を身に着けることも大事だが、それだけでは一方通行の支援になってしまう。…まずは現地のことを理解しようと努めること、そのうえで必要なことを考え、最大限できる準備を丁寧にして現地に赴き、できないことは他の人と協力していく、現地の様子に合わせて柔軟に対応していく。当たり前だが、支援

者中心であってはならないということを経験したことはとても大きなことだった。」と言います。「プロジェクトへは社会人院生の参加が多かったが、現役生は特に目先のことに忙しいのもあって、直線的な学び、最短距離での学びに関心が向きがちだと感じた。社会に出ていると、社会と自分の繋がりを考え、社会の中での位置づけを捉えるということが学びとして身につけているのかもしれない。その感覚を大学院で身につけるには、クローズな学びだけではなかなか難しい。臨床領域の院生にはぜひ参加してほしいプロジェクトだと思う。長く関わり続け、今年の学びが、来年の学びに繋がり、それが毎年毎年積み重なっていく。そのようなゆっくりとした関わりや学びも知っておくことが必要だと感じた」と報告してくれた。スタートした当時には考えてもいなかった副産物だった。

合わせて、この時期、1ヵ月にわたり、朱雀キャンパスで漫画展をやった。通りすがりに偶然眼にする状況下、一定期間継続して開催したことで、立命館大学の関係者、外部からわざわざ足を運んでくれた人、たまたま通った人が見てくれ、予想を上回る反響をもらった。

一定の想定のもとにスタートさせたことが、想定を超えて発展していく。これは物事がうまく行っている良い兆しである。

つづく